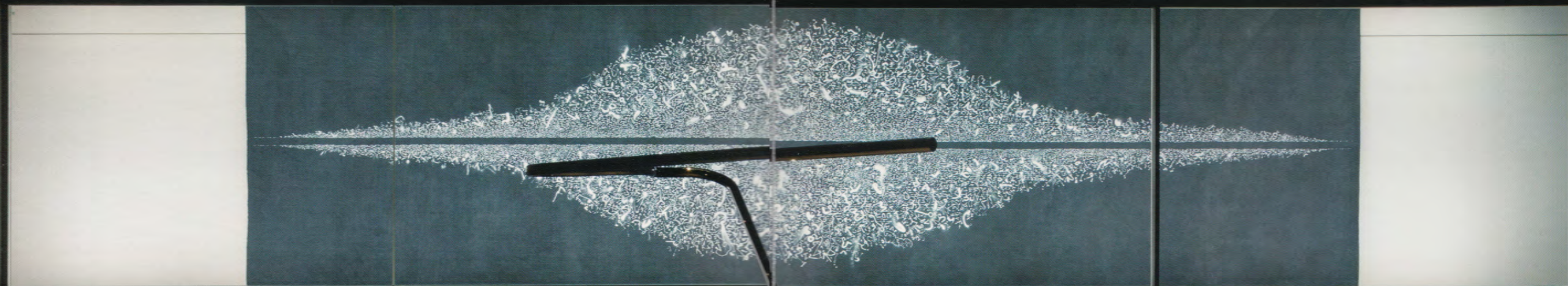
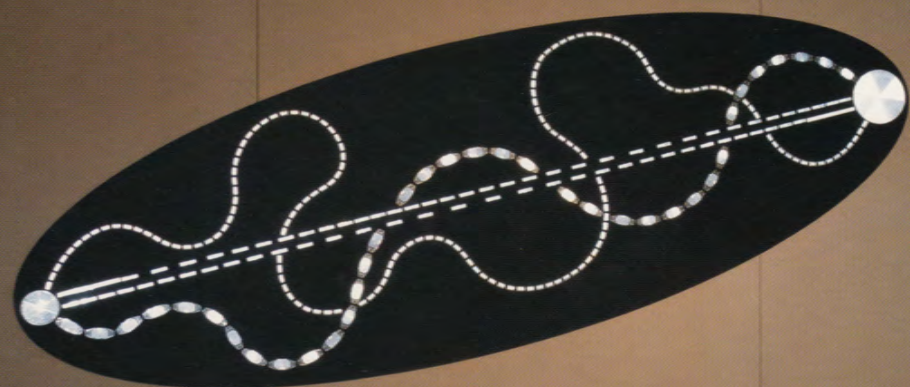


鈴木ヒラク
SUZUKI HIRAKU



手前 3-4: Drawing Tube #01 / 2016 / 個人蔵
奥 3-7: Constellation #19 / 2017 / アーツ前橋蔵



3-1: Road (Entrance)/2016/個人蔵 | 3-2: Road (Middle)/2016/個人蔵 | 3-3: Road (Exit)/2016/個人蔵



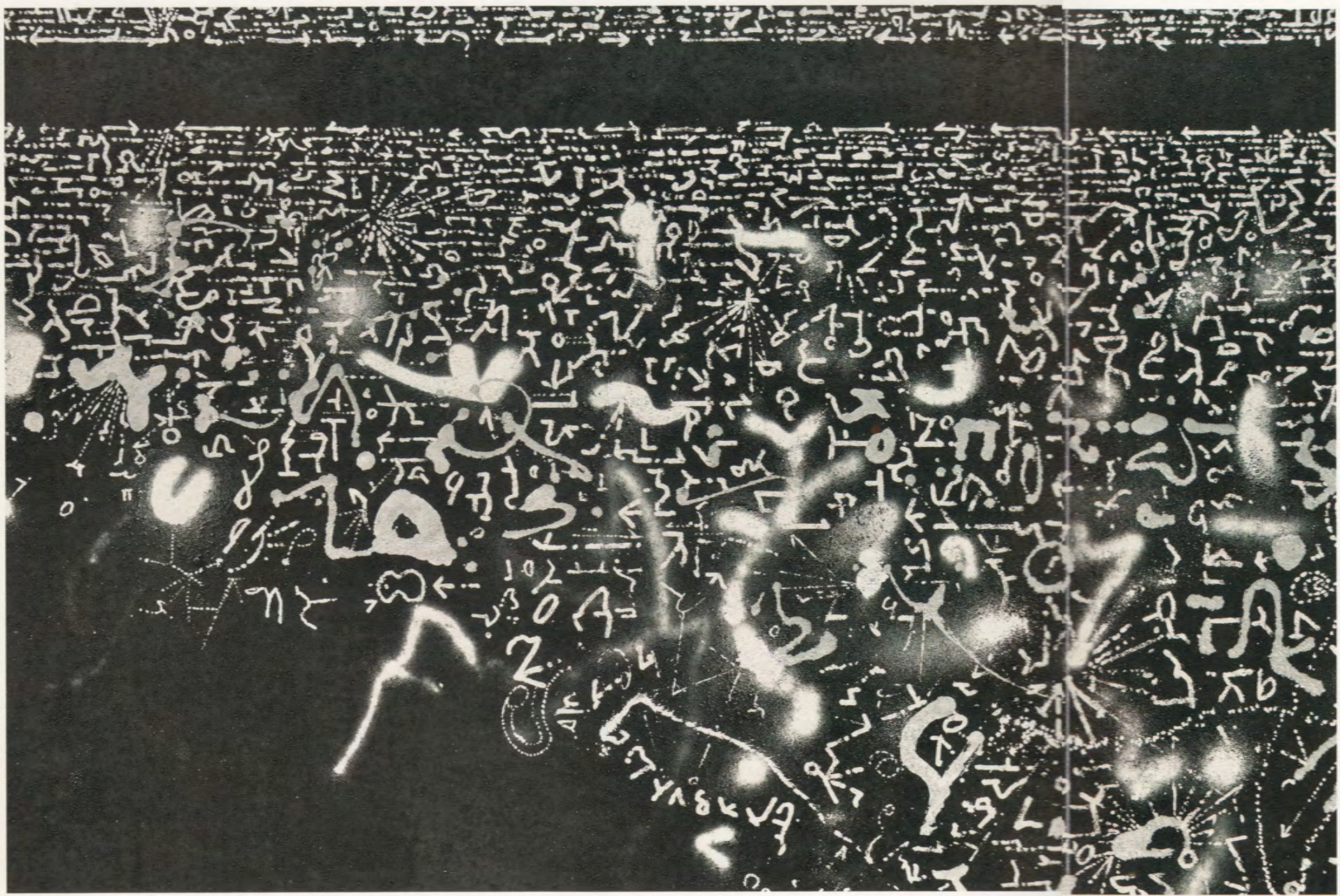
ドローイングは時間芸術である。それはまず、固定化された結果よりも過程としての身ぶりや思考の動きそのものを指す。そして運動には時間が伴う。しかしドローイングは、この一回性の運動が行われるところのリニアな時間軸だけを内包するわけではない。その痕跡を見る側に発生するもうひとつ別の時間も扱うからだ。

例えば描く/書く行為にとって新しさとは何か?と考えてみれば、ラスコー洞窟にクロマニオン人によって書かれた線描より、約2万年後に同じフランスで行われている“DRAWING NOW”で見られるような現代ドローイングの方が新しいとか、中国の王羲之の書より現代書の方が新しい、という議論には

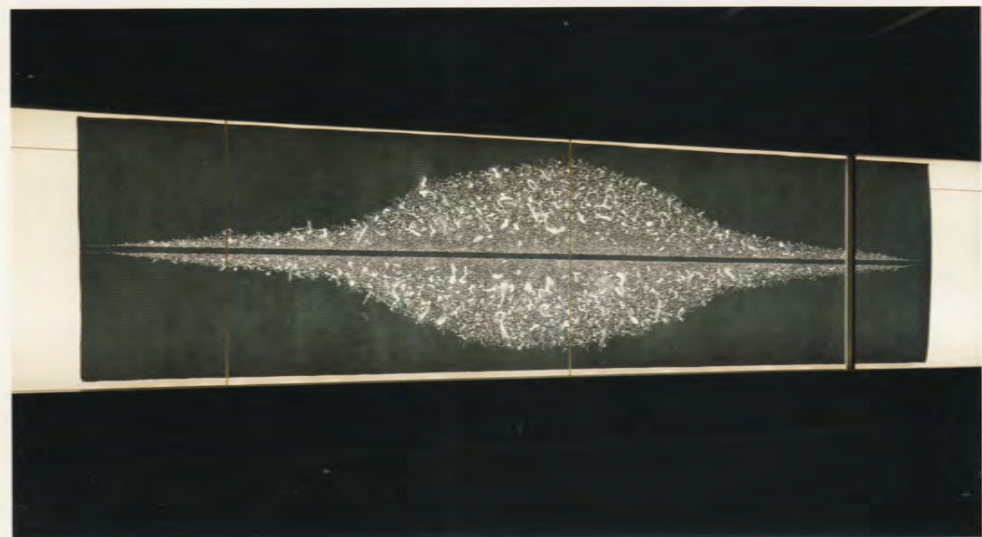
意味がない。いつの時代においても、刻まれた線を辿るこちら側の内面に、生き生きと再生される時間の方が重要なのだ。運動の痕跡の中に留められた記憶が新しく喚起される時、行為の主客は反転する。

その意味で、ドローイングはレコードのような一種の記憶装置とも言えるだろう。見る者の内面の針で何度でも新しく再生され得る痕跡。だからこそ、キース・ヘリングの言葉を借りれば「ドローイングは魔法を通して生き続ける」のである。

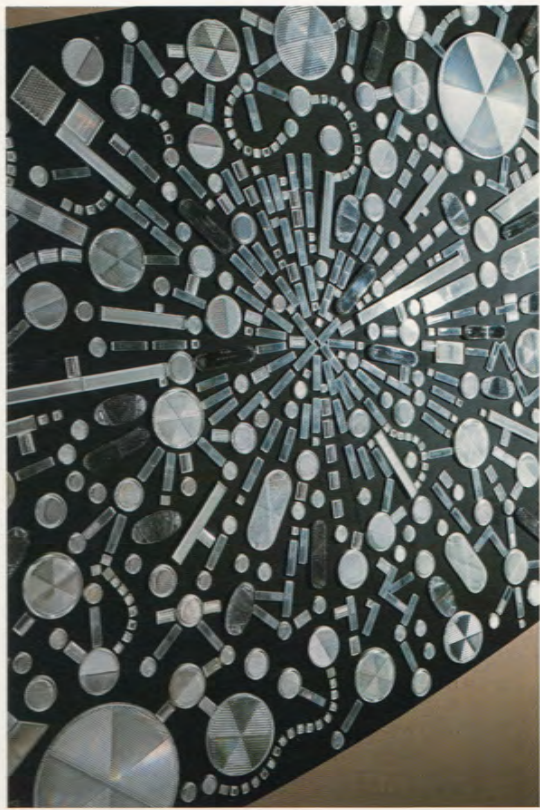
鈴木ヒラク



3-7

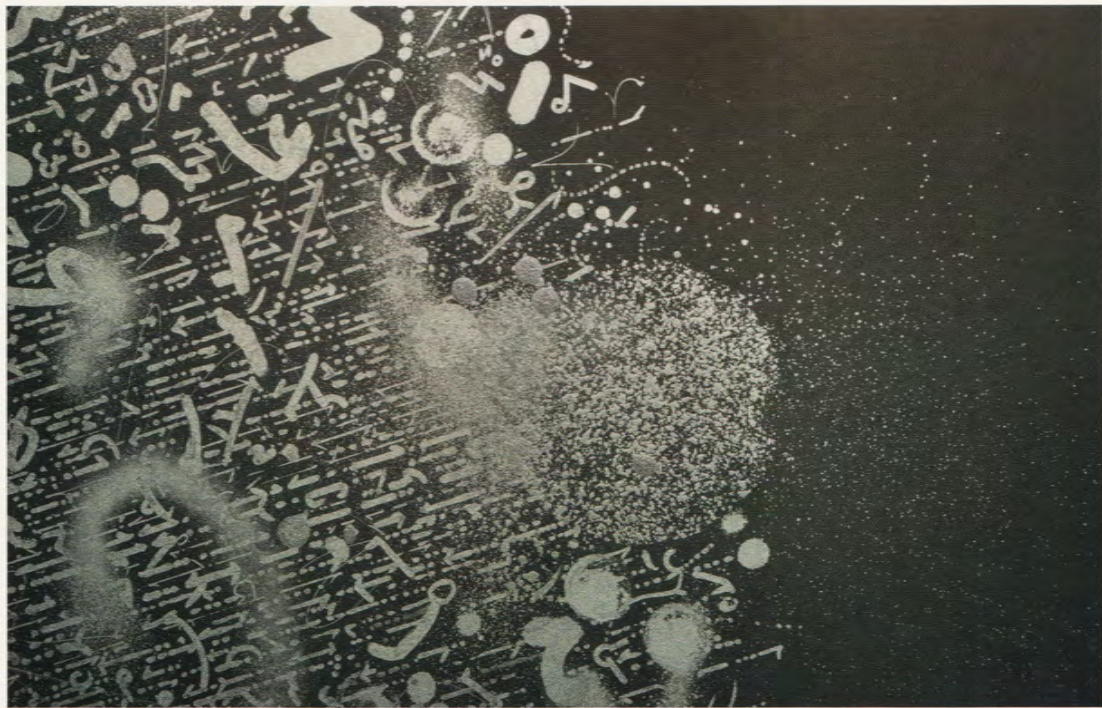


3-7



3-1

3-1: Road (Entrance) (部分) / 2016 / 個人蔵
 3-6: Constellation #17 (部分) / 2017 / アーツ前橋蔵
 3-7 (上): Constellation #19 (部分) / 2017 / アーツ前橋蔵
 3-7 (下): Constellation #19 / 2017 / アーツ前橋蔵



3-6



3-8



3-5



3-6



3-9

「輪郭線を思い出す」
(宮城県美術館での展示に寄せて)

僕の最初の記憶は多分、坂道の光景である。生まれてから2歳まで住んでいた仙台の自宅前の長い坂道のことを、最近になってふと思い出すことがある。

一般的に坂道では、平地では起こらないような身体感覚の覚醒があると思う。傾斜による、地面と足裏の間の摩擦がトリガーとなって、接地点から双方向的なベクトルが生まれ、そ

れがその場所とこちらの身体の深部にある記憶を引き出し結びつけるのかもしれない。この引き出し合いの構造は、描く/書くことの起源である、対象を引っ搔いて痕跡を残すという行為の中で働いている双方向的な力学とも通じている。

昨年の初夏、北海道と東北各地に点在する、主に縄文時代に作られた環状列石の調査を行ない、写真・ドローイング・テキストで記録した。環状列石の付近には、住居の遺跡や貝塚や洞窟壁画といった文明の痕跡がしばしば存在するが、青森の小

牧野遺跡や北海道の西崎山環状列石・北黄金貝塚のように、それらの多くは見晴らしと水はけの良い、遠く海を望んだ斜面に作られている。

僕はとにかく古い書物を読むように、レコードを再生するように、その周りをぐるぐると歩き斜面の起伏を踏みしめながら、石の配置と輪郭を見ていた。それは、場所の記憶を自らの記憶と結びつけながら、自分の輪郭を再発見するような時間でもあった。

今回、仙台の美術館で初めて展示をする機会にあたり、昨年の環状

列石のフィールドワークを思い出しながら、ささやかな映像作品を制作した。書画カメラの下に白いロール紙を設置し、その上に小石を配置してジャラジャラと動かしたり、マーカーで点や線を描き加え、ロール紙を引っ張りながらライブで録画していったのだが、僕は手元ではなくスタジオの壁にプロジェクターで投影された画面の方を常に見ながら行っていた。画面を反転しコントラストを最大にすることで、白紙だった背景は闇となり、石はほぼ輪郭だけを残してただの白い光となる。光の粒に手で直に触れて配置・操作するよ

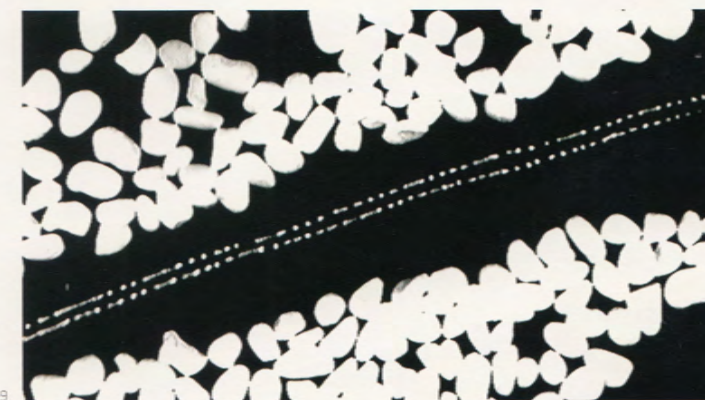
うな感覚の中で、記憶とは光跡なのだった。

記憶は新しく生まれたり、変形もする。僕は古いものを懐かしむのではなく、そこにある線をよく見て、辿ったり、なぞったり、引き伸ばしたり、時にはそこになかった点を加えてみたりすることで、時間と空間のレイヤーを行き来する新しい回路を発掘したいと思っている。

鈴木ヒラク



3-9



3-9



3-9

鈴木ヒラク 時間と空間を貫くドローイング

和田浩一〔宮城県美術館学芸員〕

島田雅彦が「郊外三部作」と呼ぶ小説の第一作目『忘れられた帝国』¹では、東京の郊外に暮らす主人公の生活が説話の形で語られている。小学生である主人公は、自宅近くの森を探索するうち、宅地造成の工事現場から縄文式土器を発見し、しばし発掘熱に浮かされる。それはのっぺりとした日常に非日常が顔をのぞかせた瞬間だった。

――

高度経済成長期、都市の郊外では急速な宅地開発がなされ、それにともなって埋蔵文化財や遺跡が多く見つかった。日本の古層が、大都市の周縁部でむき出しの状態になっていたわけで、それは先史時代に直結したトンネルの入口が、大都市の真横にぽっかりと口を開けていたということになる。

――

鈴木ヒラクは2歳の頃、仙台市から川崎市麻生区に引っ越した。彼も小さい頃、家の周りを掘って遊んだ発掘少年であり、土器や様々なものを掘り出すことに熱中したという。そのとき、日常の生活では隠れて見えなかった現在と過去とを結ぶ長大な時間的・空間的な意識の飛躍を、鈴木も感じたことだろう。こことかなたを繋ぐ糸口を見つけ、それを掴み出すこと。それが鈴木制作の原点である。

――

鈴木がこれまで展開してきたのは「拡張された意味でのドローイング」というべき活動である。通常ドローイングとは紙の上に線で描かれ、絵画へと至る過程にあってその準備段階を構成する。絵画と異なり「『全体のルール』に従うわけではない」「完成した全体との関係においてのみ意味をもつでもない」²このように、ドローイングは確定的ではないがゆえに、あらゆる方向に開かれており、自由な表現形態として独自のフィールドを持っているといえる。

――

だが鈴木というドローイングとは、さらに広い範囲を含むものであり、平面上に描かれた線のみでなく、ある場所からある場所をつなぐ行為の軌跡、あるいは何かと何かの間を行き交うシグナルなども含めて、「空間や時間に新しい線を生成していく、あるいは潜在している線を発見していく過程そのものを指す」³

ものだとしている。実際鈴木はこれまでも、立体、映像、パフォーマンスなど、ジャンルを横断した旺盛な活動を行ってきた。強調すべきなのは、身体や意識の動いた軌跡も積極的にドローイングへと組み入れようとしている点であり、公共空間でのドローイング・パフォーマンス (fig. 1) や、手の動きをリアルタイムに映写しながらのドローイングなども、彼の重要な表現手段だった。そこにはダンス、さらにはストリートカルチャー (グラフィティ) との類縁関係までも指摘できるだろう。

――

鈴木は作品制作を「考古学」になぞらえ、作品を「解説を待つ一種の記憶装置」と捉えている。たとえば、今回の展覧会には出品されないが、『bacteria sign』シリーズ (fig. 2) は、作者が初期から今日まで、断続的に継続して制作している作品であるが、その制作方法とは、土に一旦枯葉を埋めたのちに葉脈部分を掻き出すことによって、プリミティブな形象 (葉脈によるドローイング) を顕わにするというものである。この手法はまさに「発掘」そのものであって、ここでは作者という存在が、長年の土砂の堆積により地中深く隠れている遺物を探して掘り出す、考古学者の役割を与えられている。と同時に、土を「手で掻き出す」という制作行為に焦点が合っていることも明らかである。このような実際の身体の運動、それにともなう意識の流れが、時間と空間の中に描いた軌跡を、注意深く丹念に収集すること。そして時には大胆に他のメディアへと組み換えることが、鈴木のドローイングを形作る。

――

今回の展示では、墨の上にシルバーで描いた『Constellation』シリーズ、反射板による作品『Road』、ステンレスチューブの立体、そして新作の映像作品によって構成される。

――

星座 (= Constellation) は、地球から見える無数の星の中の幾つかを、架空の線によって結びつけ、そこに形象や意味を見出すことだが、それも作者にとってはドローイングの一つである。何万光年も離れた場所から今地球に届いている星の光自体、遠いかなたの星と私たちとの応答 (コレスポンド) ととらえることが



fig. 1: 鈴木ヒラクドローイング・パフォーマンス/ゲスト: Raz Mesinal 2011/
会場: Location One (ニューヨーク)

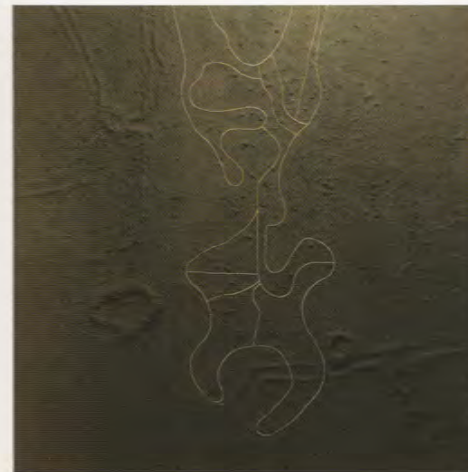


fig. 2: 『bacteria sign #31』2008年/土・枯葉・アクリル・木製パネル

でき、それもまた作者においてはドローイングの一部を構成している。墨の上にシルバーペイントで描かれた無数の記号は、宇宙の間と光を放つ星たちとの対比を思わせる。明と暗、ネガとポジなどの「対比」も、意識の応答を引き起こすものとして、ドローイングに類するものと鈴木は捉えている。『Constellation』シリーズでは、方向性の定まった直線的な記号表現と、フリーハンドによるスプレー表現との二つの対比が、画面全体の動勢を決定している。横長の『Constellation #19』は、遠くから全体を見ると中央が厚みをもつ形をしており、銀河を真横から見た形を連想させるが、作品に近づくと、ロゼッタストーンを思わせる記号の集積が延々と広がっているような印象を強く受ける。その結果、鑑賞者は自身の中で、ミクロ的視点とマクロ的視点との頻繁な転換を体感することになるだろう。そこにもまた、瞬間的なドローイングがなされるのである。

――

『Road』の3点は、夜の高速道路などで道巾を示したり、街なかの交通標識などに用いられ注意を喚起したりする反射板が使われている。見る者が光を発すると鋭い光を送り返してくるこの反射板もまた、人工的に光のシグナルを作り出し、断続的な光の応答を発生させる。

――

『Recollection of the Contours』は本展で初めて公開される新作のビデオ作品である。作者は昨年の夏、北海道内に点在する環状列石を多数リサーチし、写真とドローイングでメモを残した。本作はその時の考察が反映されており、手描きによるドローイングよりも、小石を配置してなされる構成が主体となっている点が注目される。

――

これまでもライブパフォーマンスの際に、紙の上に小石をばらまき、ドローイングのきっかけとすることがあったが、今回のビデオの小石の使用はより積極的である。手元でのドローイングを壁面にビデオ投影しながら行うこれまでの一部のパフォーマンスと類似する部分もあるが、単純に筆を小石に置き換えたというわけではない。

――

自然物であることを示す不規則な形がまず印象に残る。そしてその動き方からそれが実物の小石と分り、それを人が並べる作業を示すことによって、自然と人工、オブジェクトと記号、偶然と計画性といった問題を浮き彫りにする。その際、コントラストを最大にしてネガ・ポジを逆転させ、白と黒の単純なシルエットへと変換することによって、全体が整理され、簡潔で抑制の効いた、強い印象をもたらす表現へと至っている。

――

一つの石を置いてから、次の石を置くまでの行為は、それが環状列石のように大地の上であれ、この作品のように紙の上であれ、無限のバリエーションの中から行われた「選択」の一つであることに変わりはない。二つの石の間をつなぐ線には意識の流れが折り重なり、内に時間と空間を含んだドローイングが生まれる。この作品ではそれが適度なテンポで連鎖していくのである。

――

小石によるドローイングは、組み替えや修正が自在であり、それを瞬時にすることもできる点で、簡潔、明快で、また鈴木持の持つスピード感に適した表現となった。手の行為の軌跡と物の作る配置をめぐる展開として、鈴木ドローイングのもう一つの面を見せてくれている。

(文中敬称略)

1: 島田雅彦『忘れられた帝国』1995年、毎日新聞社

2: ティム・インゴルド『メイキング』2017年、左右社

3: 『Drawing Tube vol. 1 Archive』2017年、Drawing Tube

1978 宮城県仙台市生まれ
2001 武蔵野美術大学美術学部情報映像学科卒業
2008 東京藝術大学大学院美術学部先端芸術表現科修了
現在 神奈川県相模原市在住

website: hirakusuzuki.com/

個展

- 2000 「bacteria sign」ギャラリープレスカ(東京都)
- 2003 「鈴木ヒラク個展」INAX ギャラリー 2(東京都)
- 2004 「NAZO」UPLINK ギャラリー (東京都)
- 2006 「dig」Galerie du Jour Agnes b.(パリ)
- 2008 「NEW CAVE」トーキョーワンダーサイト渋谷(東京都)
- 2010 「GENGA and Recent Drawings」Galerie du Jour Agnes b.(パリ)
- - 「U」island MEDIUM(東京都)
- 2011 「Glyphs of the Light」WIMBLEDON space(ロンドン)
- 2013 「Excavated Reverberations」Daiwa Anglo Japanese Foundation(ロンドン)
- 2015 「あなたの記号」国際芸術センター青森(青森市)
- - 「GENZO」Misa Shin Gallery(東京都)
- 2016 「Constellations」西武渋谷店(東京都)
- 2017 「アーツ前橋連携企画 特別展示 鈴木ヒラク」rin art association(高崎市)
- 2018 「交通」ART FRONT GALLERY(東京都)
- - 「The Writing of Meteors」EACH MODERN(台北市)

主なグループ展

- 2000 「現代日本版画画展」AECI(サンタクルス/ボリビア)
- - 「World Wide Network Art 2000」ギャラリーフロー
ル/法然院(京都市)
- 2001 「do bacteria sleep?」京都市美術館・Tranq Room・etw-
Be Good Cafe/全4会場(京都市)
- 2002 「Tokyo Art Jungle」東京国際フォーラム/JR山手線
(東京都)
- 2004 「Tokyo Style in Stockholm」Karl Johans Torg(ストック
ホルム)
- - 「Tokyo Style in Gothenburg」Roda Sten(ゴッテンプ
ルグ/スウェーデン)
- 2008 「都市のディオラマ:Between Site & Space」トーキョー
ワンダーサイト渋谷(東京都)
- - 「MIMITOME」TOU SCENE(スタバンガー/ノルウェー)
- - 「FIXMIXMAXI2 - 現代アートのフロントライン」札幌宮
の森美術館(札幌市)
- 2009 「Between Site & Space」Artspace Sydney(シドニー/
オーストラリア)
- - 「VOCA 展 2009」上野の森美術館(東京都)
- - 「愛についての100の物語」金沢21世紀美術館(金沢市)
- - 「Re:Membering - Next of Japan」Gallery LOOP(ソウル)
- - 「Red Bull House of Art」Hotel Central(サンパウロ)
- 2010 「六本木クロッシング2010: 芸術は可能か?」森美術
館(東京都)
- 2011 「DRAWING - 線を描くという営為」island MEDIUM
(東京都)
- - 「地表から遠く離れて 鈴木ヒラク/逢坂卓郎」TALION

- Gallery(東京都)
- 2012 「One And Many」Location One(ニューヨーク)
- - 「SIDE CORE- 日本美術とストリートの感性」BA-TSU
ART GALLERY(東京都)
- - 「バンタレイ小金沢健人/鈴木ヒラク」TALION Gallery
(東京都)
- - 「ソリエリュミエール 物質・移動・時間、そして観智」
金沢21世紀美術館(金沢市)
- 2013 「Wall Art Festival in Warli」Jivan Sikshan Mandir
Ganjad(ダハヌ/インド)
- - 「DRAWING NOW PARIS」Carrousel du Louvre(パリ)
- - 「高橋コレクション——マインドフルネス!」霧島アート
の森(鹿児島県)ほか巡回
- - 「日産アートアワード」Bank ART Studio NYK(横浜市)
- 2014 「DRAWING NOW PARIS」the Carreau du Temple
and Espace Communes(パリ)
- - 「バンクーバービエンナーレ」(バンクーバー、カナダ)
- - 「国東半島芸術祭 希望の原理」旧香々地町役場(大
分市)
- 2015 「TRAITS d'esprit」Galerie du Jour Agnes b.(パリ)
- - 「COSMOS/INTIME」バリ日本文化会館(バリ)
- - 「5x3」Kunstraum Düseldorf(デュッセルドルフ/ドイツ)
- - 「THINK TANK Lab Triennale / International Festival
of Contemporary Drawing」ヴロツワフ建築美術館
(ヴロツワフ/ポーランド)
- 2016 「第8回恵比寿映像祭「動いている庭」」恵比寿ガー
デンホール(東京都)
- - 「Very Addictive」Re extension of Aesthetics in Daily
Life - 銀川現代美術館(銀川/中国)
- - 「ぐるっと展望!現代アート入門——高橋コレクショ
ン」金津創作の森(福井県)
- - 「山形ビエンナーレ」東北芸術工科大学(山形市)
- 2017 「繊細と躍動」ポーラミュージアムアネックス(東京都)
- - 「いちばらアート×ミックス2017」アートハウスあそ
うばらの谷(市原市/千葉県)
- - 「高橋コレクションの宇宙」熊本市現代美術館(熊本市)
- - 「ヒツクリコ ガツクリコ ことばの生まれる場所」アー
ツ前橋(前橋市)
- - 「point to line アブデルカデール・ベンチャマ/鈴木ヒ
ラク」(キュレーションも)アニエス・ペー銀座(東京都)
- - 「アートのなぞなぞ——高橋コレクション展」静岡県
立美術館(静岡市)
- 2018 「コレクション展3 見ることの冒険」金沢21世紀美
術館(金沢市)
- - 「psmg vol.003 鈴木ヒラク×コンタクトゴンゾ」コン
タクトゴンゾ事務所(大阪市)
- - 「21世紀の美術 タグチ・アートコレクション展」平塚
市美術館(平塚市)
- - 「ビヨンドワンダー さまざまなユートピアの眼差し」
名古屋芸術大学アート&デザインセンター(名古屋市)
- - 「アラワシの詠」はじまりの美術館(猪苗代町/福島県)

アーティスト・イン・レジデンス

- 2009 2-3月 財団法人東京都歴史文化財団の助成により
Artspace Sydney に滞在(オーストラリア)
- - 11-12月 Red Bull House of Art に参加。サンパウロ
に滞在(ブラジル)

- 2011 5-8月 財団法人東京都歴史文化財団の助成により
チェルシー・カレッジ・オブ・アーツに滞在(イギリス)
- - 9月-12年3月 アジアン・カルチュラル・カウンシル
(ACC)の助成によりニューヨークに滞在(アメリカ)
- 2012 9月-13年8月 公益財団法人ポーラ美術振興財団
在外研修員としてベルリンに滞在(ドイツ)

主なライブ・ドローイングパフォーマンス(w/は共演を示す)

- 2000 8月 bacteria sign w/nibo, 岩井主税 つつじの里児
童遊園(東京都)
- 2003 4月 MINDBOGGLER w/生西康典、植野隆司 Super
Deluxe(東京都)
- 2004 8月 Tokyo Style in Stockholm w/Shing02, 梅田宏
明 Kulturhuset(ストックホルム/スウェーデン)
- - 12月 NAZO NIGHT vol. 4 w/Tenniscoats UPLINK ギャ
ラリー(東京都)
- 2006 7月 dig Galerie du Jour Agnes b.(パリ)
- 2009 4月 愛についての100の物語 recording w/ 植野隆
司 金沢21世紀美術館(金沢市)
- - 5月 愛についての100の物語 w/Shing02 金沢21
世紀美術館(金沢市)
- 2010 3月 六本木アートナイト w/Shing02 森美術館(東京都)
- 2011 5月 Mai Jazz Festival Kitchen Orchestra, 永戸鉄也
TOU SCENE(スタバンガー/ノルウェー)
- - 8月 Glyphs of the Light WIMBLEDON theatre(ロンドン)
- - 12月 Hiraku Suzuki Live Drawing w/Raz Mesinai
Location One(ニューヨーク)
- 2012 3月 Opalnest presents Editquette w/Loren Connors,
Julien Langendorff Printed Matter(ニューヨーク)
- - 6月 HORS PISTES w/カジワラトシオ、東野祥子、河
村康輔、Rokapenis UPLINK FACTORY(東京都)
- - 7月 XXX w/植野隆司 Super Deluxe(東京都)
- 2013 1月 ソリエリュミエール、そして観智 w/ 植野隆司
金沢21世紀美術館(金沢市)
- 2014 3月 COVERED TOKYO w/スガダイロー PARK HOTEL
(東京都)
- - 6月 Vancouver Biennale w/Ross Birdwise, Soressa
Gardner, Joe Rzemieniak Coal Harbour Community
Centre(バンクーバー/カナダ)
- - 9月 栗津潔、マクリヒロゲル1「美術が野を走る: 栗
津潔とパフォーマンス」オープニングプログラムw/
スガダイロー 金沢21世紀美術館(金沢市)
- - 10月 Red Bull Music Academy w/ 灰野敬二 Super
Deluxe(東京都)
- - 10月 山形ビエンナーレ w/鈴木昭男 文翔館(山形市)
- 2015 5月 あなたの記号 国際芸術センター青森(青森市)
- 2016 8月 Drawing Tube vol.0 w/ 坂口恭平 shimauma(東
京都)
- - 9月 Drawing Tube vol.1 w/ 吉増剛造 - 東北芸術工
科大学(山形市)
- - 9月 「本を描く」Drawing Tube vol.2 w/ 伊藤存 京
都造形芸術大学・東北芸術工科大学 外苑キャンパ
ス(東京都)
- 2017 4月 スガダイローとJASON MORAN と東京と京都 w/
スガダイロー、Jason Moran ロームシアター(京都市)
- - 9月 札幌国際芸術祭2017 w/ 吉増剛造 札幌芸術
の森(札幌市)

- - 9月 New Optimism w/ハトリミホ KATA(東京都)
- - 11月 Drawing Tube vol.3 w/ アブデルカデール・ベン
チャマ Tokyo Arts and Space Residency(東京都)
- - 12月「かくとはなす」w/今福龍太 アーツ前橋(前橋市)
- 2018 6月 一本の木から w/ 小金沢健人 金沢21世紀美
術館(金沢市)

受賞

- 2017 1月 THE 2017 FID PRIZE インターナショナル・ドロー
イング・コンテスト グランプリ受賞

パブリック・コレクション

- - Agnes B. Collection(フランス)
- - アーツ前橋
- - 市原湖畔美術館
- - 大分市
- - 金沢21世紀美術館
- - 高橋コレクション
- - タグチ・アートコレクション
- - 日産アートコレクション
- - ロンドン芸術大学(イギリス)

主要文献

- 〈著作〉
- 「bacteria sign」自主出版/2000
- 「GENGA」河出書房新社/2010
- 「Beam Drop」(EP) Rui gato & Hiraku Suzuki (test
tube)/2010
- 「鉱物探し」(株)ビームス/2010
- 「植野隆司×鈴木ヒラク “Son et lumiere”」(CDブック
レット)植野隆司、鈴木ヒラク/majikick/2016
- 「Drawing Tube vol.01 Archive」鈴木ヒラク: ドローイ
ング・パフォーマンス/ゲスト: 吉増剛造/Drawing
Tube/2017

〈自筆文献〉

- エッセイ「Drawing as signals」『Bright 6』Graduate
School Directory/ロンドン芸術大学/2011
- エッセイ「Drawing As Excavating」『PA』A Journal of
Performance and Art./Volume34, No.3 MIT Press
Journals/2012

〈展覧会図録・リーフレット等〔は作家ステートメント等を収録〕〉

- 「Tokyo Style In Stockholm 2004」Letterhead AB/
2004
- 「TEAM 11 鈴木ヒラク」財団法人東京都歴史文化財
団トーキョーワンダーサイト/2008*
- 「都市のディオラマ」財団法人東京都歴史文化財団
トーキョーワンダーサイト/2008*
- 「VOCA展2009」VOCA展」実行委員会/2009
- 「開館5周年記念展 愛についての100の物語」金沢
21世紀美術館/2009
- 「六本木クロッシング2010展: 芸術は可能か?」森美
術館/2010
- 「DRAWING - 線を描くという営為」island/2011

- - 「地表から遠く離れて」(iPhone アプリ) TALION Gallery
/2011*
- - 「栗津潔、マクリヒロゲル 金沢21世紀美術館コレク
ション・カタログ」現代企画室・金沢21世紀美術館/
2012
- - 「ソリエリュミエール 物質・移動・時間、そして観智」
金沢21世紀美術館/2013*
- - 「高橋コレクション——マインドフルネス!」霧島アート
の森ほか/2013
- - 「Wall Art Festival Warli」Blue Bear Inc./2013
- - 「日産アートアワード2013」日産アートアワード運営
事務局/2013*
- - 「Red Bull Music Academy Tokyo 2014」レッドブル/
2014
- - 「山形ビエンナーレ記録集」東北芸術工科大学/2014
- - 「国東半島芸術祭公式ガイドブック」国東半島芸術
祭実行委員会/2014
- - 「5x3」Kunstraum Düseldorf/2015
- - 「COSMOS/INTIME -LA COLLECTION TAKAHASHI」パ
リ日本文化会館/2015
- - 「鈴木ヒラク あなたの記号 言語と空間 | Langue
and Space Vol.1」青森公立大学国際芸術センター青
森/2015*
- - 「第8回恵比寿映像祭——動いている庭」東京都写
真美術館/2016
- - 「高橋コレクションの宇宙」熊本市現代美術館/2017
- - 「ヒツクリコ ガツクリコ ことばの生まれる場所」アー
ツ前橋/2017*
- - 「いちばらアート×ミックス2017公式ガイドブック」い
ちはらあーとミックス実行委員会/2017
- - 「アートのなぞなぞ 高橋コレクション展」静岡県立美
術館/2017

〈主な関連記事〉

- - 「タイヤとダイヤの遭遇『Road Sign? Diamond』」原
久子/『AERA』2008年11月3日号
- - アートワーク掲載『SPROUT』Vol.11、2009年1月号
- - アートワーク掲載『よむ花椿』No.704、2009年2月号
- - オリバー・ワトソン『PAPERBACK MAGAZINE issue 2』(ロ
ンドン)/2009
- - 「Between Site and Space」『Column 3』/Artspace
Visual Arts Centre (Sydney, Australia) /2009
- - 「15メートルの紙に文様描く 21世紀美術館でライブ」
『北國新聞』2009年5月6日
- - 富樫勲『BARFOUT!』Vol.167/2009年7月号
- - 「世界の、アーティスト・イン・レジデンスから」/2009
- - 「日常の狭間の発見を描き出す鈴木ヒラクのドロー
イング」原田優輝『QUOTATION No.7』2010年4月26
日号
- - 「AUTHOR この著者に会いたい『GENGA』」岩淵貞哉
『美術手帖』2010年5月号
- - 作家紹介『美術手帖』2010年6月号
- - art book of the month『DAZED&CONFUSED
ISSUE188』2010年7月15日号
- - 「LONG REVIEW」久保正樹『intoxicate』vol.85/2010
- - 作品紹介とインタビュー『LODOWM MAGAZINE
#77』/2011
- - 「MIT Press Journals」Volume34, No.3/2012年9月号

- - IMAGE TO SURVIVE experimental group show on
paper『SPROUT』VOL.11
- - 「Drawing As Excavating」『PA』A Journal of
Performance and Art/2012
- - 大友克洋とのコラボレーションによるアートワーク
掲載『Comme des Garçons』26/2014
- - 「Rolling Stone」10 vol.110/Power to the people
- - 「架空の考古学、あるいは、宇宙を針穴に通すとい
うこと」北出智恵子『美術手帖』2015年8月号
- - 「空間を身体化するドローイング」伊藤俊治『AC2
[エー・シー・ドゥー]』17号/青森公立大学国際芸術セ
ンター青森/2016
- - インタビュー『TOKYO WONDER SITE ANNUAL REPORT
2015』財団法人東京都歴史文化財団トーキョーワン
ダーサイト/2016
- - インタビュー『日経MJ』2016年10月12日
- - 「大分市新たな壁画が完成」『大分合同新聞』2017
年2月5日
- - 「対談 写真家の食卓 西野壮平×中村裕太×鈴木ヒ
ラク」『IMA』Vol.24 /2018年5月29日号
- - 「以點和線描繪宇宙秩序(宇宙の秩序を点と線で描写
する)」楊桃苑『典藏・今藝術&投資』第314期/2018
年11月号

〈その他の主な記事〔インターネット〕〉

- - <http://www.cbc-net.com/topics/2010/02/genga.php>
2010年2月12日号
- - 「Journal | 鈴木ヒラクインタビュー」-CAT'S FOREHEAD
<http://cats-forehead.jp/journal/HirakuSuzuki.html>
- - 「THINGS 鈴木ヒラク初作品集『GENGA』」Mariko
Takei - SHIFT 2010年2月27日
<http://www.shift.jp.org/ja/archives/2010/02/genga.html>
- - 「鈴木ヒラク インタビュー」——原田優輝PUBLIC-
IMAGE.ORG 2010年5月10日
<https://archive.fo/WuQXS#selection-363.5-363.9>
- - 「〈住所不定の自然〉に惹かれる」マーカーとコピー用
紙で世界の狭間に記号を刻むアーティスト・鈴木ヒラ
クに五所純子が聞く」web DICE 2010年5月20日号
<http://www.webdice.jp/dice/detail/2447/>
- - 「Journal | 鈴木ヒラクインタビュー」-CAT'S FOREHEAD
2010年12月号
<http://cats-forehead.jp/journal/HirakuSuzuki.html>
- - 「チェックと日本の現代美術界についての感想」
ADRIAN FAVELL -ART IT 2013年3月15日
<http://www.art-it.asia/u/rhqjun/>
SRLDEKJW4upbzwvdvq8 GC/
- - 「TOP TEN FID GRAND PRIZE 2017」Brett Littman/
Andrew Solomon/Sergei Litvin
http://thefid.org/wp-content/uploads/2017/01/FID_
PRIZE2017_Catalog.pdf
- - 「Artscape レビュー Drawing Tube vol.01 Archive」
artscape 2017年7月15日号
http://artscape.jp/report/review/10137061_1735.html
- - 「2つの個展からドローイングの可能性を考える。服部
浩之が見た「鈴木ヒラク——交通」清田泰寛『Melody
Date』——ウェブ版『美術手帖』2018年5月31日
<https://bijutsutecho.com/insight/15926/>